

# 福岡県西方沖地震で被災した玄界島の島づくりに関する調査

小川拓也\*      高橋和雄\*      中村聖三\*  
 長崎大学工学部      長崎大学工学部      長崎大学工学部

## 1. はじめに

平成17年3月20日に発生した福岡県西方沖地震により、震源に最も近かった玄界島では斜面地の住宅と宅地が甚大な被害を受けた。そこで、島民の意向を反映した復興計画をもとに、福岡市を事業主体とする小規模住宅地区改良を活用した事業が導入された。平成20年3月の市営住宅の完成を最後に避難生活は解消され、現在は島での生活が再開された<sup>1)</sup>。新たな生活ではコミュニティの減少、少子高齢化、生活環境の変化など多くの問題を抱えていることが、平成20年12月行ったアンケート調査結果<sup>2)</sup>より明らかになり、島の再生のために島民を主体とする玄界島島づくり推進協議会が平成21年1月に設置された。そこで、本研究では、玄界島島づくり推進協議会設置から平成21年11月までの島づくり活動の実施状況を調査するとともに、今後の島づくりに必要なことを明らかにする。

## 2. 平成20年12月に行った島づくりに関するアンケート調査

平成20年12月に行ったアンケート調査で「玄界島島づくり推進協議会で議論して欲しい項目は何ですか」と聞いたところ、図-1のような結果<sup>2)</sup>となった。

玄界島には観光客の受け入れ施設として、震災前に旅館や物販所などがあったが、震災後はなくなった。その影響もあり、「観光客の受け入れ施設」が最も多くの選択を得て、観光振興に関して必要性を感じていることがわかる。他にも「島内での仕事の場の確保」と「少子高齢化対策」の項目も高い割合を示し、島離れや少子高齢化など将来的な人口減に強い危機感を抱いていることがわかる。また、多くの島民がコミュニティの減少を感じているにも関わらず、「島内のコミュニティの回復」の項目は最も低い結果となった。

## 3. 玄界島島づくり推進協議会の島づくり活動に関するヒアリング調査

平成21年1月7日初会合で玄界島島づくり推進協議会の役員、組織名を決定した。役員は計16人、図-2のように7団体から各2人ずつ次世代を担う代表者を選出した（女性部からのみ4人選出、最年長者は62歳、最年少者は25歳）。

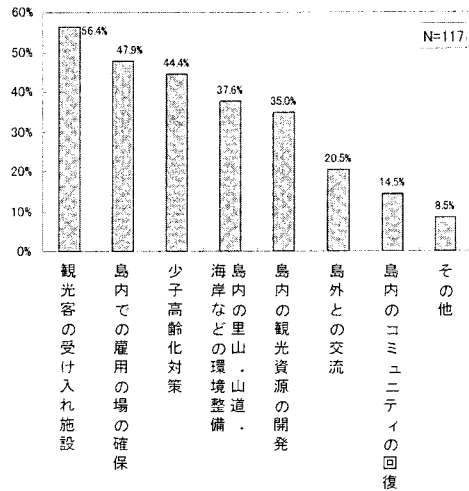


図-1 玄界島島づくり推進協議会で議論して欲しい項目

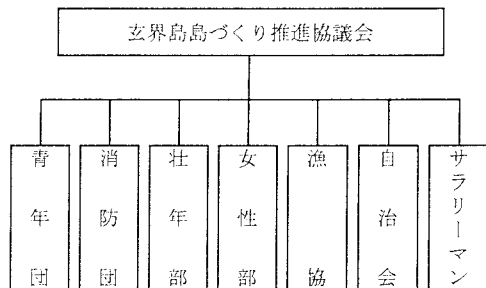


図-2 玄界島島づくり推進協議会の組織図

## (1) ワークショップの開催

震災から4年目の平成21年3月20日に島の産業振興を図るとともに、島民の憩いの場となる島づくりのきっかけづくりとなるワークショップを玄界島島づくり推進協議会が主体となって島外の建築、まちづくり、ボランティア、学生を招いて実行した。ワークショップは、「玄界島を回って何を感じたか」、「玄界島の魅力は何か」、「振興方策の提案」をテーマに掲げ行われた<sup>3)</sup>。このときに出席された意見を3項目に分けて表-1にまとめる。

## (2) 現在までの活動

玄界島島づくり推進協議会が発足から現在までに行った主な島づくり活動を3項目に分けて表-2に示した。この活動の中で、特に直売所の開設を島づくり活動の重点活動として力を注いだ。直売所では特産品(わかめ、さざえ、蜂蜜(震災後の新規特産品))の販売、クルージング(1人500円)、レンタサイクル(1日100円)、鯨飯弁当の販売を行った。直売所を運営するために島民に販売希望者を募集したが、申し出は少なかった。そのため、推進協議会の役員が交代で運営者としてボランティアで活動したが、通年で続けることは難しく、7月から9月までの期間限定といった形になった。また、来客者数が見込みよりも少なかったため、収益が伸びず収支がとんとんで、PR活動の不足に問題を残した。

表-1と表-2を比較すると、このワークショップで提案された多くの振興方策が採用されていることがわかる。参加者の多くがまちづくりや建築などに携わっており、阪神・淡路大震災の計画づくりの事例など専門家の意見を交えながら意見交換を行うことができたため、提案された振興方策に説得力があった。玄界島島づくり推進協議会の役員は島民で編成されており、島づくり活動を行うことは初めてである。そのため、島外からの来客者の提案は非常に参考になっていると思われる。この他に、「動く震災博物館」を現在計画中である。これは、来客者から「震災の爪あとがない」といった意見が参考となっており、島の10箇所に被災直後の写真を使った陶板を設置し、ガイドが被災当時の説明をしながら案内するものである。

表-1と表-2を比較すると、このワークショップで提案された多くの振興方策が採用されていることがわかる。参加者の多くがまちづくりや建築などに携わっており、阪神・淡路大震災の計画づくりの事例など専門家の意見を交えながら意見交換を行うことができたため、提案された振興方策に説得力があった。玄界島島づくり推進協議会の役員は島民で編成されており、島づくり活動を行うことは初めてである。そのため、島外からの来客者の提案は非常に参考になっていると思われる。この他に、「動く震災博物館」を現在計画中である。これは、来客者から「震災の爪あとがない」といった意見が参考となっており、島の10箇所に被災直後の写真を使った陶板を設置し、ガイドが被災当時の説明をしながら案内するものである。

## 4. 災害遺構の保存・展示

福岡県西方沖地震の災害遺構の保存は積極的に行われておらず、国営海の中道海浜公園内の液状化によって傾いた小屋と地割れが見受けられる程度である。著者らは、平成21年8月から玄界島、福岡市役所、新聞社を中心に災害資料の収集を行った結果、表-3のような資料が集まった。玄界島での災害遺構調査では、若宮神社の被災鳥居、旧中学校階段の壁・石垣のクラック、玄界島復興事務所の看板などを見つけることができた。この他、小鷹神社の被災鳥居と被害を受

表-1 ワークショップの内容

項目	玄界島の魅力	振興方策の提案
島の活性化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供が元気</li> <li>・温かい人が多い</li> <li>・人間関係の濃さ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツイベント開催</li> <li>・特産品づくり</li> <li>・食堂づくり</li> </ul>
復興した島のアピール	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災で関心が高まっている</li> <li>・近代化が進んでいる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・記念館や博物館づくり</li> <li>・玄界島カレンダーなどでPR活動</li> <li>・避難生活でお世話になった地域との交流</li> </ul>
自然とのふれあい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豊かな自然が残っている</li> <li>・車が少なく静かである</li> <li>・素朴でおいしい海の幸</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・魚料理・釣体験</li> <li>・ハイキング</li> <li>・海辺でバーベキュー</li> </ul>

表-2 玄界島島づくり推進協議会の活動内容

項目	実現させた活動	計画中の活動
島の活性化	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 直売所の開設(7~9月)</li> <li>2. 特産品の開発</li> <li>3. ワークショップの開催</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. スポーツイベントの開催</li> <li>2. 介護施設の建設</li> </ol>
復興した島のアピール	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 防災どんたくに参加</li> <li>2. 防災学習の受け入れ</li> <li>3. 全国街づくり会議に参加</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 動く震災博物館</li> <li>2. 陶板の設置(防災学習にする)</li> <li>3. 被災地交流会へ参加</li> </ol>
自然とのふれあい	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 散策コースの整備</li> <li>2. 周回道路の整備</li> <li>3. クルージング</li> <li>4. レンタサイクル</li> </ol>	

けた玄界島周辺の小島(柱島, 大机島)がある。写真などについては、福岡市役所、新聞社の協力により震災直後から復興事業完了までの島内の様子、地震の恐ろしさを伝える写真を集めることができた。長崎大学がこれまでに集めた文献などの資料もある。今後、島民の親戚などに残っている災害前の写真の発掘・保存、福岡市が作成した斜面住宅立体模型の搜索、テレビ局にある震災直後の映像の保存などを行う必要がある。

集めた災害資料は、玄界島島づくり推進協議会が進めている「動く震災博物館」や旧中学校の教室を利用した防災学習への利用を考えている。

玄界島には交番や消防署がなく、島民で組織されている水上消防団、婦人防火クラブおよび中学校全生徒による少年少女消防クラブによる防災活動が行われていた。これらが中心となって定期的に防火訓練を行っていたため、震災時に人的被害を最小限にでき、密集した斜面住宅地で火災を防ぐことができた。このように島民全体が一体となり、防災活動を取り組んでいたため被害を抑えることができたことを防災学習によって伝えることも重要である。

## 5. 島外との交流

玄界島島づくり推進協議会が活動が始めてからの島外交流は表-2に示した直売所、防災どんたく、ワークショップ、全国街づくり会議などを積極的に行ってきたが、今まで島で漁業を中心に生活

をしていた島民にとって島外へ出ることはあまり慣れておらず、不安を持っている。そのため、震災と復興過程で培われた人脈、ネットワークを活用すべきである。表-4は3項目に分けた島外交流活動の提案を示す。この中でも、避難生活でお世話になった地域との交流を増やすことが取り組みやすいと思われる。地震により避難した九電記念体育館、応急仮設住宅を建設した福岡市中央区のかもめ広場には避難生活を支えてくれたボランティアが多くおり、今後も交流を続けるべきである。そこで、玄界島をより身近に感じてもらうとともに、島の良さを周りの人に伝えてもらうために、震災後に縁が出来た個人に島外の玄界島大使といった称号を贈り、玄界島のPRマンになってもらうことを提案したい。

## 6. 情報発信

表-3 災害資料リスト

分類	内 容
災害遺構	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小鷹神社の被災鳥居</li> <li>・若宮神社の被災鳥居</li> <li>・旧中学校階段の壁・石垣のクラック</li> <li>・福岡市玄界島復興事務所の看板</li> <li>・一部損壊した柱島, 大机島</li> </ul>
写真映像資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福岡市が保管している写真</li> <li>・長崎大学が保管している写真</li> <li>・玄界島震災復興記録誌などの報告書</li> <li>・新聞などの報道写真(新聞社)</li> <li>・テレビの特別番組等の映像</li> </ul>



写真-1 小鷹神社の被災鳥居

表-4 島外交流活動リスト

分 類	内 容
観光	<ul style="list-style-type: none"> <li>・玄界島大使の称号の贈呈</li> <li>・直売所・イベントの通年開催</li> <li>・動く震災博物館の実現</li> </ul>
島づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークショップの定期化</li> <li>・福岡市との連携</li> <li>・福岡市内のNPO 団体との交流</li> </ul>
被災地ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全国被災地交流会への参加</li> <li>・避難生活でお世話になった地域や団体とのとの交流継続</li> <li>・他の被災地への支援活動</li> </ul>

玄界島の情報については、玄界小中学校と福岡市立玄界診療所のホームページなどでしか入手することができず、島内でのイベントがどのように行われているかの具体的な情報を知ることができない。そのため、直売所、レンタサイクリングなどの利用者数は当初非常に少なかった。玄界島島づくり推進協議会が行っていたPR活動は、博多港の待合室にチラシを置く程度であった。テレビの取材があり、放映後には来客が増えたという。その後ラジオにイベント情報を流してもらっている。島づくり活動を行う上で、イベントへの参加者を増やすことは重要なことであるが、テレビ局やラジオなどを毎回利用することはできない。資金や時間をかけずに情報発信するために、玄界島のイベントなどの情報を発信するホームページの開設が必要である。新潟県中越大地震から復興した旧山古志村ではホームページを開設し、イベントなどの情報だけでなく、ブログを利用し日常生活に起きたことを事細かに記載している。

## 7. 必要な島内の生活環境の改善

島内は復興事業で、道路の新設や公園の設置などで安全で整然とした地域へと改善されたが、島民同士の交流は減少し、コミュニティは回復していない。また、公園や集会所の利用も少ない。特に、高齢者の生きがい作りと外出の増加が必要である。玄界島には、管理されていない畑がかなり見受けられる。畑を再生し、高齢者に野菜などを栽培してもらい、島の直売所で特産品とすることも計画して欲しい。また、島内に小規模介護施設の建設が決定し、高齢者が安心して住める島になる見込が着いた。島民の雇用の場が増加し、コミュニティの回復に役立つことが期待される。観光振興では、来客者が豊かな自然を楽しむために海岸線の周回道路と山道の散策コースの整備が必要である。

## 8. 今後の島づくり

これまでの玄界島島づくり推進協議会の活動を基に玄界島の島づくりのコンセプトをまとめると、図-3のようになる。このうち、島の活性化は主として島外からの観光客の受け入れであるが、宿泊施設と飲食店については目途が立っていない。復旧した漁村センターを活用するとともに旧中学校跡地の活用する必要がある。復興した島の姿を見てもらうためには災害遺構の保存と掘り起しが不十分である。自然とのふれあいは、自然豊かな海と山の両方を楽しむことができる島であることをアピール

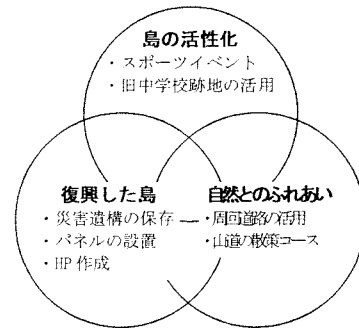


図-3 島づくりのコンセプト

する必要がある。また、玄界島島づくり推進協議会の役員がすべて企画から運営にあたっているが、負担が大きく長続きするかどうか不安が残る。活動している役員が負担に感じたら、観光客は楽しくない。島民の参加を増すとともに、島外の人的資源の活用も必要である。長崎大学も災害資料の収集、島外との交流、玄界島のホームページの作成について協力可能で実施中である。

## 9. まとめ

玄界島の島づくりは島民を主体として着実に実行されつつある。島づくりを島外の人にとってもらうための情報発信、島づくりの担い手の育成などを進めることが必要である。

## 参考文献

- 1) 福岡市：玄界島震災復興記録誌，pp.37-80，2008.3
- 2) 山下龍志，高橋和雄，中村聖三：福岡県西方沖地震で被災した玄界島住民の帰島後の復興評価と島づくりに関する調査，土木学会第64回年次学術講演会概要集第4部門，pp.219-220，2009.9
- 3) 玄界島島づくり推進協議会：まちづくり企画支援事業実施報告書，pp.5-15，2009.3